

夜が更けたコテージ。リビングで潮まみれになってぐったりしていたテレサを、マリアとリオは両側から抱えるようにして地下室への階段を降りていった。

「ママ、足元氣をつけてくださいまし♥」

「マリア.....♥ リオ.....♥ これからどこへ.....♥♥」

「決まってますわ。地下室ですの♥♥♥」

テレサの翠緑の瞳が期待と恐怖に揺れる。彼女はこの地下室に何があるか知っている。なにせここを整えたのは、他ならぬ彼女自身なのだから。

地下室の扉が開き、むせかえるような昨夜の残り香が三人を包む。リオは壁の照明を点け、部屋の中央にあるX字架へとテレサを導いた。

「テレサさん、ここに立って」

「はい.....♥♥」

テレサはおとなしくX字架の前に立つ。マリアは手際よく彼女のスーツを脱がせていった。上着が落ち、ブラウスがはだけられ、タイトスカートが床に落ちる。あっという間に下着だけの姿になったテレサは、娘の手でそれすらも取り去られ、ついに一糸まとわぬ全裸になった。

「まあ、見事な身体ですわねママ♥♥」

「や、やめてマリア.....♥♥ そんなに見ないで.....♥♥」

Qカップの爆乳が照明の下でたっぷりと揺れ、132cmの爆尻が刑罰台の冷たい板に押し付けられてひくひくと震える。股間はすでに愛液でてらてらと濡れそぼり、太腿の内側をつうつと伝って床に滴っていた。

「見せて差し上げるんですの♥♥♥ リオにママの全部を♥♥♥」

マリアとリオは手分けしてテレサの手足をX字架に固定していく。手首を頭上に、足首を左右いっぱい広げ、革ベルトをぎちぎちと締め上げた。170cmの豊満な肢体が、無防備に大きく開かれた格好で固定される。

リオは一步下がってテレサの姿をじっくりと眺め、それから壁のケースへと歩み寄った。

「.....マリア、これって」

リオが手に取ったのは、一見するとただの黒い箱だった。しかし蓋を開けると、中には無骨なスタンガンが収められている。トリガーの上に小さな安全スイッチ。電極部分は二本の金属端子が突き出していて、充電済みのランプが青く点滅している。

「五百万ボルト……殺す気？」

「あら、そんなものまで入ってましたの？♥」

マリアは心底驚いたように目を丸くしたが、その口元は明らかに笑っている。

「ママったら、いつの間にこんなものを……♥♥」

「そ、それは……♥♥ 護身用ですの……♥♥」

「護身用で500万ボルトですか？♥♥ どこの軍隊と戦うおつもりですか？♥♥♥」

テレサは答えられず、ただ羞恥に顔を赤らめた。

リオは無表情のままスタンガンの安全スイッチを解除した。

バチバチバチバチバチッ！！

青白い電光が電極の間で激しくスパークする。その音たるや地下室中に響き渡り、空気そのものが震えるかのようだ。オゾンの焦げ臭い匂いがたちまち広がった。

「ひっ……♥♥♥」

テレサの身体が、X字架の上で大きく震えた。翠緑の瞳がスパークの青い光を映し、恐怖と期待が入り混じった複雑な色に揺れている。彼女の白桃の性器から、新たな蜜がとろりと溢れ出し、床に小さな水溜まりを作った。

「あ、あの……♥♥♥ リオ……♥♥♥」

「なに」

「せ、せめて心の準備を……♥♥♥ 10秒だけ、10秒だけお待ちいただけませんか……？♥♥♥」

テレサの声は震え、涙声に近かった。無理もない。500万ボルトのスタンガンは、もはやSMの域を超えている。それでも彼女は、逃げようとは口にしない。ただ、ほんの少しの猶予を乞うただけだ。

「……わかった。10秒だけ待つてあげる」

マリアはケラケラと笑いながら言うと、テレサの潮まみれの股間を指ですくい、ぺろりと舐めた。

「リオ、まだまだですわよね♥♥♥」

「もちろん」

それからしばらく、地下室には断末魔のような悲鳴が断続的に響き続けた。

バチバチバチバチバチッ！！

「ん”ぎ”い”い”い”い”い”っ！！♥♥♥」

バチバチバチバチッ！！

「お”お”お”お”お”お”っ！！♥♥♥」

リオはテレサの太腿の内側、爆尻の肉厚な部分、爆乳の下側、脇腹、首筋、そして再び白桃の性器の真上と、執拗に場所を変えながらスタンガンを押し当て続けた。電撃が奔るたび、テレサは絶叫し、そのたびに潮を噴き上げ、連続してマゾイキを繰り返した。

「も、もう.....♥♥♥ もういきすぎて.....♥♥♥ 死にますの.....♥♥♥ 本当に死にますの.....♥♥♥」

テレサはすでに声も掠れ、目尻からは涙が溢れ、口元からは涎がだらだらと垂れ流れていた。X字架の下の床には、何度目かの巨大な潮溜まりができていた。全身の筋肉は過剰な電撃と絶頂で消耗しきっており、それでも彼女の白桃の性器だけは、まだ期待にひくひくと震え続けていた。

「.....あ”.....♥♥♥ あ”.....♥♥♥ もう、もう無理.....♥♥♥ これ以上は、本当に.....♥♥♥」

「あら、無理ですか？♥」

マリアがそっとテレサの顔に近づき、汗と涙で濡れた頬を手のひらで包んだ。それはそれは優しい仕草だった。

「ママ、実はですね」

マリアは小声で、秘密を打ち明けるように囁いた。

「.....もう一丁あるんですの♥」

「……………え♥」

マリアは悪戯っぽく微笑むと、背後に隠し持っていたものを見せた。リオが使っているものとまったく同じ型の、二丁目のスタンガンだ。マリアはその安全スイッチをカチリと解除する。

バチバチバチバチバチバチッ！！

「ひぎ”っ……！！♥♥♥」

二つ目の電撃音が地下室に轟き、テレサの身体が大きく跳ね上がった——スタンガンはまだ押し当てられてもいないのに、音だけで彼女はアクメを迎えたのだ。

そして、その瞬間。

じょろろろろろ……

テレサの白桃の性器から、潮とは違う黄色がかった液体が流れ出した。失禁だった。CEOとして世界中のビジネスシーンを渡り歩いてきた女が、娘とその恋人の前で、完全に膀胱の制御を失ったのだ。

「あらあら♥♥♥ お漏らしですか？♥♥♥ ママったら、大人なのに♥♥♥」

「ひ……♥♥♥ ちが、ちがうんですの、これは、これは違……♥♥♥」

「何が違うんですの？♥ 立派なお漏らしじゃありませんこと♥♥♥ リオ、見てくださいますよ♥♥♥ ママったら、おしっこ漏らしてますのよ♥♥♥」

「……すごいね。でも、いちいち確認しなくても見えてる」

リオは無表情のまま、失禁してなお白桃の性器をひくつかせるテレサを見下ろした。

「じゃあマリア、せっかくだから二丁でやろうか」

「ええ、もちろんですわ♥♥♥」

リオとマリアは左右に分かれ、それぞれスタンガンを構えた。

「どのあたりからいきます？♥♥」

「そうだね……まずは乳首、かな。テレサさんの乳首、すごく主張してるし」

「同意ですわ♥♥♥」

気絶したテレサのX字架の下には、潮と失禁と愛液と腸液の巨大な水溜まりが広がっていた。二人はまずその掃除から始めることにし、マリアがバケツと雑巾を取りにいくあいだ、リオは改めてテレサの豊満な肢体を見下ろし、次のプレイの構想を静かに練り始めるのだった。

今夜もまだまだ、地下室の時計は夜半を指したばかりである。